

参加申込受付中！



© Karin Schermbrucker/CARE



新しいスタッフとともに、歩く国際協力 「Walk in Her Shoes 2023」が始まります

昨年10月にCAREの一員となりました指原恵子です。前職は、外資系家具メーカーのマーケティング部に所属し、インテリアを通して、あらゆる人が健康的かつより良い環境で働けるよう、イベントやコミュニケーションを行ってきました。国際協力NGOで働くのは初めてですが、ご支援くださる皆さまの思いを心に留め、精一杯努めてまいります。

さて、今年で12回目となる本キャンペーンを担当することになり、今とてもわくわくしています。水汲みのために、毎日歩かなければならない女性や女の子たちに思いを馳せながら歩く、シンプルで健康的なキャンペーンは、今年も3月8日の「国際女性デー」から始まります。参加方法のひとつ「好きな時間、好きな場所で歩く」では、皆さまが歩く500歩につき1円が協賛企業から寄付され、今年は皆で15億歩を目指します！皆さまのご参加を心よりお待ちしております！お申込は、同封のちらしまたは左のQRコードからお願いいたします。



「国際女性デー 2023 デジタル写真展」を開催します

女性フォトグラファーがきりとる女性たち
～今をいきる、明日をつくる～

会期：2023年3月1日（水）
～同年3月31日（金）
会場：当財団ホームページ



今年の国際女性デーのテーマは、「デジタル・オール：ジェンダー平等のための革新と技術」。本展では、写真という技術を用いて社会課題を伝えている女性フォトグラファーの作品を紹介します。ぜひ、革新と技術を用いて今をいきる女性と明日をつくる女子たちの姿をご覧ください。



© Sincerely, Alexia Rae/WIBDI/CARE

スタッフ紹介



個人寄付担当
永井詩織

これまで自治体などで男女共同参画推進や多文化共生に従事してきました。2022年4月の入局以来、皆さまのあたたかいご支援に勇気づけられながら、日々学びながら楽しく業務に取り組んでいます。昨年末に事務所で実施された全職員対象のジェンダーワークショップでは、日々の生活を振り返りながら、社会によって作り上げられた女性・男性「らしさ」について考えました。一方の性が担う「べき」といった無意識の思い込みへの個々の気づきが、ジェンダー平等を達成する上で大切だと感じました。



個人寄付担当
保延弘美

海外ボランティアの経験からCAREの活動に興味をもち、ご縁があって、2022年9月に個人寄付担当として入職しました。担当のひとつ、「あつめて国際協力」では、使わなくなったモノを集め、換金して、途上国の女性と女子の自立支援に還元する活動をしています。例えば、古本やDVD・ゲームの買取査定相当額を寄付する「チャリボン」や、貴金属やブランド品、骨董品などを寄付する「お宝エイド」があります。ぜひ、同封のちらしをご参照ください。皆さまのご協力をお待ちしております。

個人支援者専用ダイヤル TEL:03-5499-9931

CARE アクションする

公益財団法人 ケア・インターナショナル ジャパン

〒171-0031 東京都豊島区目白2-2-1 目白カルチャービル5階
TEL:03-5950-1335 FAX:03-5950-1375
E-mail: info@careintjp.org Website: www.careintjp.org
Facebook: www.facebook.com/CAREJp Twitter: https://twitter.com/CAREJp

※小誌へのご意見、ご感想を募集しています。
発行元までお寄せ下さい。

※このニュースレターのデザイン・レイアウトは、CAREの
デザインボランティアの会田ひとみ様のご協力により、制作されています。



CARE World

Vol. 44 ケア・インターナショナル ジャパン
Newsletter February 2023



ケア・インターナショナル ジャパンは、世界100か国以上で人道支援活動を行う国際NGO ケア・インターナショナルの一員です。
災害時の緊急・復興支援や「女性や女子」の自立支援を通して、貧困のない社会を目指しています。

Contents

- page 1 ケア・インターナショナルの最新動向
- page 2 タイ：理数系（STEM）教育を通じたリーダーシップ育成事業
- page 3 ウクライナ危機緊急支援事業
 - ・歩く国際協力「Walk in Her Shoes 2023」
- page 4 国際女性デー 2023 デジタル写真展
 - ・スタッフ紹介

With コロナで動き出した CARE、事務局長も海外出張を再開

2022年、世界では脱コロナの動きが急速に広まり、CAREにおいても国境を越えた出張が頻繁に行われるようになりました。日本からも6月のパリでのCARE世界総会への出席（前号ニュースレター Vol. 43 参照）に続き、9月にドイツのボン、10月に東ティモール、さらに11月にはレバノンのベイルートへと海外出張が続きしました。今回は東ティモールとレバノン・ベイルートへの出張についてご報告します。

東ティモールへは、外務省無償援助資金による「農業用水改善事業」の設備完成記念式典への出席のため、目賀田理事長と河崎事務局長が出張しました。訪問地は首都ディリから約90キロ離れた山岳地帯の農村で、四輪駆動車で5時間をかけてようやくたどり着く僻地にありました。この事業は、雨がほとんど降らない乾季においても農業を可能にするものです。地域の農民にとって、まさに救いの雨に等しく、式典は東ティモール政府や地方政府、現地日本大使館の高官、そして多くの地域住民が参加する盛大なイベントとなり、現地のテレビニュースでも報道されるなど大きな関心を引きました。

レバノンの首都ベイルートではCAREの事務局長会議が開催されました。かつては「中東のパリ」と呼ばれ栄華を誇ったベイルートですが、長く続いた内戦やその後の経済危機、そして2020年に起こったベイルート港の大爆発などの結果、国家経済は破綻し通貨が暴落するなど、国民は厳しい暮らしを強いられています。さらに隣国シリアから多くの難民が流入し、いまやレバノンの総人口の1/4を難民が占めるまでに至っています。事務局長一行はシリア難民の多くが暮らす北部トリポリを訪れ、CAREによる難民支援の実態を視察しました。厳しい状況にあっても、CAREの現地事務所が士気高く誇りをもって難民支援に取り組んでいる姿には大きく勇気づけられました。

この事務局長会議では、CAREを含む国際NGO 6団体が共同で採択した「Pledge for Change（変革の誓い）」と呼ばれる文書についても議論が行われました。これは、国際支援のあるべき姿として、支援を行う国と支援を受ける国との間において、「真に対等なパートナーシップ」を通じた支援を実現するための誓いです。2030年までこの誓いの達成度合いを評価し続ける責任を自らに課すものでもあり、今後の私たちの活動の重要な指針となるものです。



東ティモールの山村で住民による歓迎を受けて目賀田理事長（中央）と伊藤現地統括（右）と

（事務局長 河崎 卓）

タイ：理数系（STEM）教育を通じたリーダーシップ育成事業（第 2 期）報告

2017 年 4 月から 2 期にわたり、日産自動車（株）のご支援のもと同社工場があるサムットプラカーン県を含む 3 県において実施してきた本事業が、最終年度を迎えています。タイでは、隣国からの移民が多い地域の子どもの学習環境は厳しく、中学・高校を卒業した後の職業選択も極めて限定され、貧困に陥りやすい状況です。

このような中、当財団は、在校生を対象に、課外活動として様々な研修や起業体験活動の機会を提供し、ライフスキルやリーダーシップの育成、また職能訓練を行っています。さらに、現代社会を生き抜くために必要なジェンダー意識や身近な社会課題への理解と対応スキルの習得に向けても、多様な取り組みを行っています。

STEM* キャンプを通じた環境理解学習

複数の学校が合同で参加する形で、タイで深刻な環境問題の 1 つ「大気汚染」について考える参加型キャンプを開催。地球規模の課題への理解を深める全体セッションを行った後、生徒たちは小グループに分かれて、PM2.5 除去を目的とした集塵装置制作のワークショップに参加しました。様々な種類のフィルターを試して最善の素材を選び、実際に簡易的な装置を制作。最後にグループごとに自作装置の集塵機能を試す実験を行いました。



◀ ラヨーン県の学校から参加したノパーラトさん「他校の生徒と一緒にワークができて、とても楽しかったです。PM2.5 集塵装置を使って実際に粉塵を集め、大気汚染レベルを特別なソフトを使って解析するなど、STEM の視点から、多くを学ぶことができました」

*STEM とは、Science（科学）、Technology（技術）、Engineering（工学）、Mathematics（数学）の頭文字をとった言葉。



▲人体に影響を与える確率は？
PM2.5 粉塵量による様々な影響を算出するための実験中

昨年 11 月には、タイ日産が運営する「Nissan Experience Center（体験施設）」への訪問が実現。生徒たちは、STEM が実社会で活かされている現場を視察しました。社員の皆さまから、同社の環境負荷低減に向けたミッションのほか、石油消費を減らし気候変動や大気汚染問題に対処するカギとなる電気自動車の仕組みや製品開発のお話などを直接うかがう貴重な機会となりました。交通手段としてだけでなく、蓄電池としての利用もでき、家庭での消費電力を賄うと同時に、災害時などライフラインが途絶えた際には電源供給源にもなるという説明を聞き、身近な生活や未来を変える技術の力に、目を輝かせました。

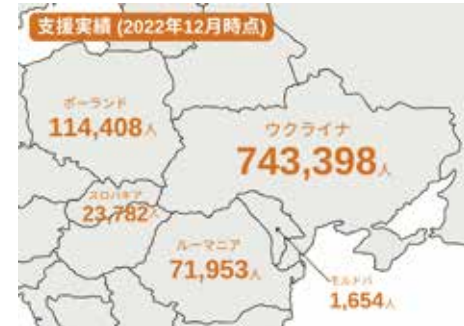
◀ 緊張気味にタイ日産社員の方のお話を聞く生徒たち。
充電完了後には、電気自動車への試乗体験も！



▲実際にマーケットに赴き、土産物の撮影をする教師

ウクライナ危機緊急支援事業 報告

2022 年 2 月 24 日のロシアによるウクライナへの軍事侵攻直後より、CARE は、現地のパートナー団体とともにウクライナ国内および周辺国で支援活動を行っています。同年 9 月、事態の長期化と広範に及ぶ支援の必要性に対応するため、ウクライナ西部のリヴィウに CARE ウクライナ事務所を設立しました。また、東部のヴィニツィアに出張所、ポーランドのジェシュフに越境拠点において連携しながら、これまでに 95 万人以上に支援を届けることができました（2022 年 12 月時点）。



氷点下 20 度、ウクライナの「独立以来最悪の冬」

氷点下 20 度という厳しい寒さの中、度重なる攻撃を受けたエネルギーインフラが十分に機能しない状況が続いています。各自治体では、電力不足に対応するために計画停電が実施され、人々は止まない砲撃の中、暗闇そして寒さとも戦わなくてはならない最悪の状況に陥っています。CARE とパートナー団体は、「独立以来最悪の冬」に直面しているウクライナの人々へ、衣類、毛布、暖房などを提供し、被害を受けた家屋やシェルターの修繕・改修を強化しています。



© Reagan Hodge

▲スタッフが実感する「難民の第二波」
CARE が支援する、ポーランドのプシェムィシルにある一時宿泊施設にて

厳しい寒さと暗闇の中で過ごす、ウクライナの人々の年末年始▶



© CARE/CFSSS

改修されたシェルターで家族 5 人と暮らす、ユリアさん

ユリアさんと 5 人の家族は、ウクライナ南部の戦闘が激しいスカドフスクから、50 もの検問所を通過する危険なルートを辿って、西部の都市リヴィウまで避難しました。

「私たちは、各検問所でチェックを受けました。私たちが笑っている写真でさえ、検問所の職員を刺激し、通過の可能性が低くなってしまうかもしれないと思い、携帯電話を初期設定にクリアしました。いつ撃たれるのか、爆弾が落ちるのかと不安でしたが、運良く通過することができました」
「(CARE が支援するシェルターで暮らすようになって) やっと安心できるようになりました。将来の計画は立てず、今は、子どもたちが喜ぶことをするだけです」



© CARE/Sarah Easter

起業体験活動を支える教師向けに新規研修を実施

本事業の活動の柱は、様々な研修受講後に集大成として行われる起業体験活動です。今年度も 15 校の生徒たちが、グループごとに商品企画から製造、販売まで一連の活動を実践しています。これらの活動には、CARE からのノウハウや資金的な支援のほか、各校の教師らのサポートが不可欠です。続くコロナ禍で重要性が増すオンラインを活用した商品販促・PR について習得すべく、今年は教師向け研修としてメディア・プロダクション研修を初開催。3 県から 35 名が参加しました。

座学と実践の 2 日間に及ぶ研修では、タイ日産社員様によるマーケティング研修ほか映像制作についても学び、実際に 5 つの商品プロモーションビデオの制作を行いました。